

日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化

三上 京子

[要 旨]

本研究は、豊かな表現力を持つ語群として日本語に豊富に存在し、日常生活において多用されるオノマトペ（擬音語・擬態語）に焦点をあて、初級終了から中級段階にある学習者がオノマトペを用いた様々な表現に触れることができるよう、日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化の試案を提示するものである。

基本語の選定に際し、始めにオノマトペとは何かというオノマトペ定義の問題を先行研究を概観しながら論じる。次に、日本語教育における基本語彙に関する文献をもとにして、日本語の初級・中級教科書および新聞記事、雑誌記事のコーパス、シナリオ集等の一般言語資料のデータも参考にしながら、日本語教育のための基本オノマトペを選定する。

さらに、選定した語を学習・指導する際のリソースとして利用できるよう、基本オノマトペの教材化を試案として提示する。この教材化では、従来の辞書における語義説明では不十分であった点を改めるべく、『コウビルド英語学習辞典』をモデルとして、文脈を伴った長い例文の中でその語の意味を記述するという方法を採用する。また、オノマトペは書き言葉より話し言葉においてより多く用いられるということから、日常的な場面の中でオノマトペが使われている「会話例」も提示する。

この基本オノマトペの教材化の一部は、国立国語研究所 e-Japan のインターネットサイト (<http://jweb.kokken.go.jp/gitaigo/index.html>) において公開中である。

[キーワード]

オノマトペの定義 初級・中級教科書 一般言語資料 基本オノマトペの選定
オノマトペの教材化

1. はじめに

日本語は世界の言語の中でも、「ごろごろ」「ガタン」「いらいら」などの擬音語・擬態語、いわゆるオノマトペを豊富に持つ言語の一つである。それらは文芸作品に限らず、日常生活の中で、特に話し言葉において頻繁に使用され、話し手の細かな心情を表したり、様々な事物の様態を生き生きと描写したりする際に欠かせない語群である。

しかし、これまでの日本語教育、特に初級の段階においては、多くの教科書やカリキュラムが文型・文法シラバスを軸として構築されており、学習者が必要とする語彙の教育に目が向けられることが少なかったと言える。中でもオノマトペについては、その使用頻度や重要性に見合うだけの十分な学習や指導がなされているとは言い難い（三上，2003）。その結果、中級から上級の段階になって急に、新聞・雑誌、テレビ番組や広告などのメディア、および周囲の日本人の会話等を通して数多くのオノマトペに出会い、戸惑う学習者も多いのではないだろうか。また指導す

る教師の側も、初級から中級前期においてほとんど体系的に扱われていなかったオノマトペを、中級後期以降どのように指導していったらいいかという問題、指導する際の適切な教材や有効な指導方法が見当たらないという現実にあつかることになる。

日本語は語彙が豊富な言語であると言われる。そしてその中でも特に豊かな表現力をもつオノマトペを学習者が使えるようになることは、積極的に支援されるべきことだろうと思う。そのためにはまず、教師がオノマトペを様々な表現に欠かせない重要な語群として認識し、その特徴や一つ一つの語、特に基本的な語の意味・用法をしっかりと把握する必要がある。また、学習者にオノマトペに興味を持たせ、学習者がオノマトペについて知りたい、学びたいと思ったときに、適切な教材をリソースとして提供し、さらに教室活動の中でどうすれば効果的に提示していけるかという指導の方策を考えていかなければならない。

本稿は、以上のような研究動機と、日本語学習の比較的早い段階からオノマトペを効果的かつ積極的に学習・指導するべきだという主張のもとに、日本語教育のための基本的なオノマトペの選定とその教材化の試案を提示するものである。

2. オノマトペとは

2-1. オノマトペの範疇

日本語に「オノマトペ」あるいはより一般的な呼称としての「擬音語・擬態語」という語彙が豊富にあることは、誰も認めるところであろう。しかし、ではオノマトペとはいったいどの語からどの語までを指すのか、ということは明らかにされているだろうか。オノマトペというと、「ワンワン」「ザーザー」「がちゃん」等、生物の声や自然現象・事物の音を表す語、また「くるり」「ざらざら」等、動きや様子を具体的に描写する語がまずイメージされる。このうち、前者のいわゆる「擬音語」をオノマトペとすることに異論が唱えられることはない。だが、後者のいわゆる「擬態語」については、「ぐっすり」「ぶらぶら」等、母語話者の語感としても、また擬音語・擬態語辞典の見出し語としても採録され、オノマトペとして認識されている語と、「はっきり」「きちんと」等従来一般の副詞と認識されてきた語との境界はどこで引くのか、ということが問題となる。

オノマトペとはいったいどのような語群なのであろうか。国語辞典や国文法における品詞分類を見ても、「オノマトペ」または「擬音語」「擬態語」というラベルは見当たらない。それらはほとんどすべて〔副詞〕あるいは〔形容動詞〕として、また一部の語は〔名詞〕〔サ変動詞〕という品詞として分類されている。また、数種の擬音語・擬態語辞典を見ても、見出し語として取り上げている擬音語・擬態語にはかなりずれがある。

次節で、オノマトペと考えられる語群が持つ特徴を見ていくことにより、語がどのような条件の下にオノマトペと認定され得るかを考える。

2-2. オノマトペの特徴

(1) 音象徴性

オノマトペが他の語と弁別される最大の特徴は、その音と意味に関連性が認められるという音

象徴性であろう。例えば、「す」という音を持つ語、「すいすい」「するする」「すらすら」「すてん」「すたすた」「するり」「すーっ」等には<なめらか><すべる><スムーズ><静けさ>等の意味が暗示される。また、「ころころ」と「ごろごろ」、「とんとん」と「どんどん」等における清音・濁音の対比は、対象物の軽重や感じられる音の大小等に対応している。また、「あはは」と「おほほ」の対比に見られるように、母音[a]は拡がりを、[o]は内にこもる感じを表す、また「どん」に対する「どーん」のように、母音が長音化すると動作や状態の持続性を表す等、オノマトペにおいては様々な音と意味の有縁性すなわち音象徴性が認められる。言い換えれば、ある音がある事態や状態を象徴したりイメージさせたりするとき、それは紛れもなくオノマトペである可能性が高いということである。

(2) オノマトペ標識

オノマトペの第二の大きな特徴は、その音韻・形態である。日向・笹目(1998)は、擬音語・擬態語 1,647 語をその語形から 49 の類型に分類している。この分類で最も多く見られたのが「わくわく」「がたがた」等、オノマトペに典型的な繰り返しの「A B A B」型であり、全体の約 4 分の 1 を占める。以下、語形として多い順に、「どさっ」「にこっ」等の「A B っ」型、「ぐるり」「きらり」等の「A B り」型、「すっきり」「しっかり」等の「A っ B り」型、「がちゃん」「ぽかん」等の「A B ん」型と続く。これら上位 5 つの語形とそれらの変種のほぼすべての語形は、その形態に「促音」・「撥音」・「り」・「母音の長音化」・「反復」のいずれかを伴う。これらは「オノマトペ標識」と呼ばれ、語がその形態からオノマトペと認識される重要な要素となる。

ただしここで注意しなければならないのは、上述した「オノマトペ標識」としての音韻形態を持つ語がすべてオノマトペなのかということ、そうではないということである。例えば「人々」「堂々と」「冷え冷えとする」等における「反復」や、「とつても」「でっかい」等「促音」の挿入による強調は一般語にも見られる。これらも、オノマトペの範疇、すなわち他の語との境界を定めることを困難にしていることの一因である。なお角岡(2002)では、上記 5 つのオノマトペ標識のほかに、「ぼい」「ぐい」等に見られる「い」も挙げているが、該当する語の数が限られるため⁽¹⁾、本稿ではオノマトペ標識としない。

(3) 語基と異形の存在

オノマトペは多くの場合、1 音節以上からなる語基のもとに複数の異形を持つ。例えば、「が」「た」という語基を持つオノマトペは、「がたっ」「がたり」「がたん」「がたがた」「がったん」等、多くの異形(ヴァリエーション)を持つ。ここで、語基とは、「共時的な意味において、様態を表現する形態素として最小の音韻単位」(角岡, 2001)である。そしてそれぞれの異形は、同じ語基を持つことによって、ある共通の意義素を有していると言える。言い換えれば、一つのオノマトペ語基に、オノマトペ標識としての「促音」・「撥音」・「り」等が接続したり、また「母音の長音化」「繰り返し」が起こったりすることによって、複数のオノマトペが生産され得るということである。これは、他の語に頻繁に見られることではなく、オノマトペが他の語から識別され得るはつきりした体系を持つ語群であることの証拠でもある。

(4) 統語的特徴

オノマトペは様態副詞として機能することが多いが、同時に副詞以外の複数の品詞としての用法を持つものも少なくない。例えば「きらきら」は、「きらきら(と)光る」という様態副詞としての用法のほかに、「きらきらする」「きらきらした目」「きらきら星」のように、また同様に「しっかり」も、「しっかり勉強する」「しっかりする」「しっかりした子」「しっかり者」等の用法を持つ。一方、例えば「必ず」という副詞は、「必ず勉強する」という副詞用法以外には、「必ずする」⁽²⁾「*必ずしたN」「*必ずN」等という言い方はない。

オノマトペは上記以外にも、引用用法(例:「リーン、リーン」と鳴る)、文外独立用法(例:「ピンポン!」)、漫画等のラベルとしての用法(例:「ドキッ!」)、広告等に見られる動詞省略用法(例:「足元ぽかぽか」)等、様々な用法を持つ。これらのうち、引用用法、文外独立用法、漫画のラベルとしての用法は、オノマトペが語彙化されておらずパラ言語的に用いられていることを示唆するものであり、特に臨時的な擬音オノマトペに特徴的な用法であると言える。また、動詞等の叙述要素を省略することは一般語においても見られるが、一般語の場合には、省略され得るのは「する」と「だ」という叙述要素に限られる(例:「バランスを崩して転倒」「今日から5連休」)。しかし、オノマトペにおいては「する」、「だ」以外に一般の動詞も省略することができるという点に特徴がある(例:「関東地方ぐらり(と揺れる)」「ステーキ2枚をぺろり(と食べた)」と言える。

2-3. 本稿におけるオノマトペの定義

以上、オノマトペを他の語と弁別し得るいくつかの特徴を考えたが、オノマトペには上述した4つすべての特徴を備えた典型的なものから、一般の副詞との境界にあるような周辺的なもので、その「オノマトペ度」あるいは「語彙化」⁽³⁾の程度は様々であると言える。

前述した通り、本稿の趣旨は日本語教育におけるオノマトペ学習・指導のためのリソースとして、基本的なオノマトペを選定し教材化することにある。そのためには、日本語において典型的なオノマトペのみを取り上げることも、また反対に、一般の副詞に近いとされる周辺的なものに限って取り上げることも、その趣旨には沿わない。むしろ、典型的なものはもちろんのこと、オノマトペの要素を持つと考えられる周辺的なものも積極的に取り込むことで、オノマトペという特徴的な語群を意識化させ、学習や指導の対象として認識させたいと考える。それは、例えば「はっきり」「きちんと」等従来一般の副詞として扱われてきた語も、「はき」「きち」という語基をもとに、「はきはき」「きちきち」「きっちり」等、意義素を共有する異形を持つからである。また「びっくりする」「いらいらする」等、「する」を伴って動詞として用いられる語の中にも、オノマトペとしての音象徴性と形態的特徴を持っているものがある。これらの語をオノマトペとして、その体系性や特徴に着目させて指導していくことで、中級後半から上級の語彙学習がより効率的になると考えられる。

よって、本論文においては、これまで一般の副詞として認識されていたような語、すなわちオノマトペとしては周辺的であると考えられていたような以下の語も、オノマトペであると定義する。

| | | | | |
|------|------|------|------|------|
| あっさり | きちんと | さっぱり | しっかり | じっと |
| そろそろ | ちゃんと | はっきり | びっくり | ゆっくり |

3. 日本語教育のための基本オノマトペの選定

3-1. 基本語彙の先行研究

基本オノマトペを選定するにあたり、まず日本語教育における基本語彙に関する先行研究から以下の8点を取り上げ、どのようなオノマトペが選定されているか見ることとする。

- (1) 国立国語研究所 (1984) 『国立国語研究所報告 78 日本語教育のための基本語彙調査』 秀英出版
- (2) 文化庁文化庁国語課 (1983) 『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』 京和工業
- (3) 玉村文郎 (1987) 「日本語教育基本 2,570 語」(『日本語教師養成通信講座 日本語の語彙・意味 (1) (2)』アルク
- (4) 国際交流基金・日本国際教育協会編 (2002) 『日本語能力試験 出題基準【改訂版】』 凡人社
- (5) 玉村文郎 (2003) 「中級用語彙—基本 4000 語—」『日本語教育』116 号
- (6) 文化庁 (1990) 『外国人のための基本語用例辞典』 大蔵省印刷局
- (7) 専門教育出版『日本語学力テスト運営委員会』編 (1998) 『改訂 品詞別・A～Dレベル別 1万語語彙分類集』 専門教育出版
- (8) 工藤真由美 (1999) 『児童生徒に対する日本語教育のための 基本語彙調査』 ひつじ書房

上記8点の基本語彙文献に選定されたオノマトペの異なり語数は249語であるが、各文献におけるオノマトペの選定語数および全体の語彙数に対する割合は、それぞれ以下の通りで、文献によってかなり異なることがわかる。

- 文献 (1) 6,000 語のうち 61 語・・・1.0%
- 文献 (2) 5,167 語のうち 70 語・・・1.5%
- 文献 (3) 2,570 語のうち 12 語・・・0.5%
- 文献 (4) 7,800 語のうち 70 語・・・0.9%
(2級までの4,833語のうち47語・・・0.8%)
- 文献 (5) 4,000 語のうち 23 語・・・0.6%
- 文献 (6) 4,500 語のうち 108 語・・・2.5%
- 文献 (7) 10,172 語のうち 203 語・・・2.0%
(レベルBまでの6,310語のうち105語・・・1.7%)
- 文献 (8) 5,500 語のうち 63 語・・・1.1%

3-2. 基本オノマトペの選定に向けて

日本語の基本オノマトペを、学習・指導する目的で選定するにあたっては、音声や形態の面のみならず、文中でどう用いられるのかという統語論の観点、どのような文脈で用いられるのかと

いう観点からも十分な考察と整理が必要である。その上で初級後期から中級において学習・指導することが可能であると思われる語、すなわち意味や用法の習得が比較的容易なものというのが一つの基準となるであろう。また汎用性のあるもの、つまり日常の言語生活において使用頻度が高く、学習者が教科書や教材、各種印刷媒体、メディア等において遭遇する可能性が高いオノマトペ、またそのオノマトペを習得して実際に使う機会がより多くあるもの、ということも同時に大切な基準となるはずである。

次に、オノマトペの語数であるが、日本人が通常使用していると思われる総語彙数のうち、オノマトペと考えられるものはいったいどれくらいの割合であろうか。玉村（1979）の調査によれば、『分類語彙表』の収録語数 32,600 語のうちオノマトペは 791 語であり⁽⁴⁾、その割合は約 2.4% である。一方、3-1. で調査した 8 種の基本語彙文献において中級レベルまでに選定されているオノマトペの割合は平均すると約 1.2% であり、『分類語彙表』における割合の約半分である。これは、教育の場面、特に初級から中級前期までの段階では、どうしても基礎語としての名詞や動詞、形容詞等の学習・指導が先行するからだと考えられる。しかし、本稿が目指すところの日本語教育のための「リソース型教材」という考え方に沿うなら、一般の言語使用の実態により近い形で提供することが望ましいのではないかと考える。よって本稿では、日本語教育のための基本オノマトペとして、玉村（2003）の「中級用語彙-基本 4,000 語-」の 1.5% から 2% である 60~80 語を目安に選定することとし、基本語彙先行研究 8 種の文献のうち 3 種以上の文献に選定されている以下の 87 語を基本オノマトペの原案とする。

<基本オノマトペ原案> 87 語 (50 音順)

| | | | | | |
|--------|------|------|--------|--------|--------|
| あっさり | いらいら | うっかり | うろうろ | がたがた | がっかり |
| がちり | がやがや | きちんと | ぎっしり | きっぱり | ぎゅうぎゅう |
| きよろきよろ | きらきら | ぐずぐず | ぐっすり | ぐっと | こつこつ |
| こっそり | ごろごろ | さっさと | さっと | ざっと | さっぱり |
| さらさら | しくしく | しっかり | じっくり | じっと | じゃぶじゃぶ |
| しょんぼり | じろじろ | ずきずき | すっきり | すっきり | すっと |
| すらすら | ずらり | ずるずる | せつせと | そっくり | そっと |
| そろそろ | ぞろぞろ | たっぷり | だぶだぶ | ちゃんと | ちらちら |
| でこぼこ | どきどき | どっと | どンドン | にこにこ | にっこり |
| のろのろ | のんびり | はっきり | ぱったり | はっと | ぱっと |
| はらはら | ばらばら | ぴかぴか | ぴたりと | びっくり | ぴったり |
| びっしょり | ぶつぶつ | ふと | ふらふら | ぶらぶら | ぶるぶる |
| ふわふわ | ぶんぶん | ぺこぺこ | へとへと | ぺらぺら | ほっと |
| ぼつぼつ | ぼんやり | まごまご | めちゃくちゃ | めちゃくちゃ | ゆっくり |
| ゆったり | よちよち | わいわい | | | |

ここで、この基本オノマトペの原案が、初級後半から中級段階の指導・学習にとって真に基本

的かつ必要な語であるかを検討するため、以下のように選定のための4つの基準を設ける。そして、この基準に従って語の削除、追加を行い、基本オノマトペの再選定を行う。

(1) 意味や用法の理解が難しい語、共起する語や使用する場面と相手、使用する機会が限られている語、他の語句や表現で言い換えることで同様の表現意図が表出できると考えられる語等、初級後半から中級の学習者にとって必須ではないと判断される語を原案から削除する。また一般の言語資料における出現頻度が低く、学習者が遭遇する可能性が低いと思われる語も同様に削除する。

(2) 基本語彙先行研究において2種以上の文献に選定されている語、または初級から中級の教科書・教材の複数に出てくる語のうち、基本的な動詞・形容詞・名詞と共起する語、また比較的やさしい文型・文脈の中において用いられると思われる語を追加する。

(3) 一般の言語資料において出現頻度が高く、学習者が中級後半から上級の学習、また日常の言語生活において遭遇する可能性が高いと思われる語のうち、基本的な動詞・形容詞・名詞と共起する語、また比較的やさしい文型・文脈の中において用いられると思われる語を追加する。

(4) 音韻形態がよく似た語やほぼ同様の意味を表す語が二つ以上ある場合、どちらか一つを知っていれば他の語は知らなくても表現者の意図を表出することが可能である、あるいは一つの語から他の語の意味や用法を類推することができると思われる場合、どちらか一方を選択する。その際、基本語彙先行研究の文献において、より低いレベルで選定されている語のほうを「基本的」と考え、選択する。

3-3. 日本語教科書および一般の言語資料に見られるオノマトペ

ここで、選定の際の参考とするため、日本語教科書および一般言語資料におけるオノマトペの使用状況を調査する。

まず始めに調査の対象としたのは、現在広く用いられている初級教科書14種21冊と中級教科書10種13冊である⁽⁹⁾。調査の結果、初級ではオノマトペの出現総語数は232語、うち異なり語数が92語、中級では出現総語数590語、異なり語数が203語であった。初級教科書2種以上に見られたオノマトペは28語で、そのうち基本オノマトペの原案87語にない語として「ゲーゲー」「バタン」「ワンワン」等の擬音語と、「がんがん」「きりきり」等の擬態語が見られた。一方、中級教科書の3種以上に見られたオノマトペは34語で、原案にない語として「ざあざあ」「げらげら」等の擬音語と、「くたくた」「わくわく」等、人の様態や感情を表す擬態語が見られた。次に、日常の言語生活におけるオノマトペの使用状況を知る手掛かりを得るため、新聞・雑誌等一般の言語資料にどのようなオノマトペが出現しているかを調査した。調査の対象としたのは、以下の4種5点の資料である。

(9) 『朝日新聞』(1985年～1998年)の記事全文(『NTTデータベースシリーズ日本語の語彙特性第7巻』)

(10) 「現代雑誌200万字言語調査語彙表 公開版」(2006) 国立国語研究所
<http://www2.kokken.go.jp/goityosa/index.html>

- (11) (a) 映画 10 作品のシナリオ (『02 年鑑代表シナリオ集』(2003) シナリオ作家協会)
 (b) テレビドラマ 7 作品のシナリオ (『テレビドラマ代表作選集 2003 年度版』(2004) 日本脚本家連盟協同組合)
- (12) 『ドラえもん』(短編 45 巻)の擬音語・擬態語 富山大学ドラえもん学コロキウム
<http://www.inf.toyama-u.ac.jp/doraemon/index.html>

まず、(9) の新聞記事において高頻度で出現している語のうち原案 87 語になかった語は、「ぎりぎり」「すんなり」「くっきり」「うんざり」等である。反対に、原案にある「ぎゅうぎゅう」「きよろきよろ」「じゃぶじゃぶ」「ずきずき」「だぶだぶ」「でこぼこ」「ぶんぶん」「へとへと」「まごまご」は、いずれも出現頻度順が 300 位以下と低かった。

(10) の雑誌で原案以外の語で出現数が多い語は、「ぐんと」「ずばり」「しっとり」「ちょっぴり」「ふっくら」等で、原案にはあるが出現数が 2 回未満の語は、「こつこつ」「ちらちら」「でこぼこ」「びっしょり」「ぶんぶん」「へとへと」「ぼつぼつ」「まごまご」等であった。(11) のシナリオ集では、資料の性質上当然と思われるが、「ぽつり」「カッと」「ポカんと」「ちらっと」「きよとん」「ぼうっと」等、人物の動作を描写する語が多く用いられている。(12) の漫画も同様に、「ぱっ」「ぼい」「むくむく」「がつん」「ぱくぱく」等動作を描写する擬態語と、「きゃー」「がみがみ」「どたどた」「わーわー」「げらげら」等の擬音語が多く見られた。

3-4. 日本語教育のための基本オノマトペ

3-3. における調査と、3-2. で示した基準に基づいて考察した結果、原案を以下のように修正する。

基準(1)により削除：がっちり、きっぱり、ぎゅうぎゅう、きよろきよろ、ぐずぐず、こつこつ、しくしく、じゃぶじゃぶ、しょんぼり、ずきずき、ずるずる、せっせと、だぶだぶ、ちらちら、でこぼこ、びっしょり、ぶつぶつ、ふわふわ、ぶんぶん、へとへと、ぼつぼつ、まごまご、よちよち、わいわい

基準(2)により追加：からから、くるくる、ぐるぐる、げらげら、ざあざあ、わくわく

基準(3)により追加：うんざり、がんがん、ぎりぎり、ばたばた、ぼうっと

基準(4)により他の語を選択するため削除：にっこり(「にこにこ」を選択)、ぴたりと(「ぴったり」を選択)、めちゃめちゃ(「めちゃくちゃ」を選択)、ゆったり(「ゆっくり」を選択)

この結果、以下の 70 語を、日本語教育のための基本オノマトペ試案として提示する。

| | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| あっさり | いらいら | うっかり | うろうろ | うんざり | がたがた |
| がっかり | がやがや | からから | がんがん | きちんと | ぎっしり |
| きらきら | ぎりぎり | ぐっすり | ぐっと | くるくる | ぐるぐる |
| げらげら | こっそり | ごろごろ | ざあざあ | さっさと | さっと |
| ざっと | さっぱり | さらさら | しっかり | じっくり | じっと |
| じろじろ | すっきり | すっきり | すっと | すらすら | ずらり |

| | | | | | |
|------|--------|------|------|------|------|
| そっくり | そっと | そろそろ | ぞろぞろ | たっぷり | ちゃんと |
| どきどき | どっと | どんどん | にこにこ | のろのろ | のんびり |
| ばたばた | はっきり | ぱったり | はっと | ぱっと | はらはら |
| ばらばら | ぴかぴか | びっくり | ぴったり | ふと | ふらふら |
| ぶらぶら | ぶるぶる | ぺこぺこ | ぺらぺら | ぼうっと | ほっと |
| ぼんやり | めちゃくちゃ | ゆっくり | わくわく | | |

この 70 語は、あくまでも日本語教育におけるオノマトペの学習・指導のためのリソース型教材を作成するという目的のために選定している。従って、中級レベルまでにこの 70 語をすべて学習することを前提としたものではもちろんない。むしろ、学習者が日常の会話やメディアを通して、あるいは教科書やオーセンティックな教材の中でこれらのオノマトペに触れ、その意味や用法を知りたいと考えた時、その学習を支援する目的でリソースとして提供するものである。また、語彙の学習・習得は、通常、個人の学習目的や学習環境によって大きく異なるため、これら 70 語以外のオノマトペを学習・指導する機会がある、またはその必要性に迫られるという学習者がいることは十分考えられるので、それを妨げるものでもない。

4. 基本オノマトペの教材化

4-1. 教材化の基本的な考え方

日本語教育においてオノマトペ指導に焦点をあてようとする場合、まず取り組まなければならないことは、学習や指導の前提となる、オノマトペの意味・用法の分析とその記述であろう。ここで大切なことは、第二言語として習得するという観点からの記述である。従来の国語辞典や擬音語・擬態語辞典に見られる語義説明や用例の記述は、そのほとんどが日本語母語話者のためのものであり、説明や用例に当該語より難しい語句や文型が使用されているため、外国人学習者、特に中級までの学習者には理解しにくいものとなっていた。またいわゆる「循環定義」、すなわちある語の定義にその同義語または類義語を用いているため、説明のところにある語を引くとまた始めに引いた語に戻ってしまう、というようなこともまま見られた。このような辞書を見ている限り、学習者はその語の意味や用法をきちんと把握できないし、ましてその語がどのような文脈において実際どう用いられるのかを知ることができない。同時に教師にとっても、それらは指導の際にあまり参考にならないということになる。

そこで本稿では、学習者が語の意味と用法を知るために、また教師が説明を求められた際にどのような情報が必要なのかを考えた結果、各語の意味と用法を以下の 3 つの段階をもって提供することとした。3 つの段階とは、①統語的情報としての「用法」、②文脈を伴った「文例」とその詳しい「意味」、③日常的な場面における「会話例」の提示、である。

(1) オノマトペの「用法」の提示

始めに「用法」として、各オノマトペが文中でどのように用いられるかという統語的考察を行った上で、そのオノマトペが持つすべての用法を、意味がわかる範囲でなるべく簡潔な例文で示す。

この用法提示によって、学習者は、副詞用法であれば動詞や形容詞との共起関係、また「する」を伴って動詞となるもの、形容動詞、名詞としての用法を持つもの等、当該オノマトペの文法的働きの情報を得ることができる。

また、オノマトペのアクセントは第1拍頭高型である場合が最も多いが、用法によってはアクセント型が異なる場合がある。このことも、オノマトペを使用する際には重要な情報となるので、各用法についてどのようなアクセント型で発音されるのかということを示号で表示する。以下に、「ぺらぺら」「びっくり」の例を挙げる。

1. 外国語がぺらぺらだ。(平板アクセントのため、アクセント記号は表示しない。)
2. ぺらぺらよくしゃべる。(頭高)
3. 大きな音がしてびっくりした。(中高)
4. びっくり箱をもらった。(尾高)

(2) オノマトペが用いられる「文例」と「意味」の記述

次に、その語が用いられる「文脈」を示すことが重要であると考え、これまでの辞書や教材における単文レベルの例文ではなく、「文脈」を伴ったより長い文例、または複数の文例を提示することとした。それが、**文例と意味**における「文例」である。ここで、各語は基本的なオノマトペであるということを考え、日本語の教科書・教材に現れた例文やオノマトペ教材等の解説に見られる用例を参考に、出来る限り平易な文例を提示する。各オノマトペが複数の意味を持つ場合は、その一つ一つの意味に対応する文例を挙げる。但しここでは、文学作品等におけるその作家特有の用例や、臨時的に用いられていると思われる特殊な用例（例：樁がふらふらと揺れる）等は対象としない。また、用例として辞書等に記述があるものでも、日常的にあまり用いられていない用例（例：がらがらした女の人）は、学習者にとって習得の必要性が低いと考え省く。この「文例」によって、そのオノマトペが実際にどのような場面、状況のもとに用いられるかを示すことができると思う。

次に、それぞれの「文例」について、その<意味>を詳しく記述する。意味の記述は、できる限り平易な言葉を用い、かつ具体的に行う。すなわち、同義語による置き換えや類義語による言い換えをなるべく避け、その語が実際どのように使われるのか、その語を使うときの場面や状況を含めて記述する。記述方法は『コウビルド英語学習辞典』をモデルとして行う。この辞典は、様々な素材に表れた現代英語のデータをコンピュータを用いて分析することにより、それぞれの語が実際どのように使われているかを明らかにした新しいタイプの辞典である。最大の特徴は、従来の辞典で行なわれていたような、語の置き換えによる定義を避け、単語の意味を具体的な状況に即して文章をもって説明、何が主語にくるのか、どの前置詞をとるのかといった基本的な情報や、その単語の使われる場合や前後関係等を説明していることである。さらに、語の意味の配列も品詞別の枠組みをやめ、意味別の使用頻度が重視されているため、複数の意味・用法をもつ語の「よく使われる」側面が一目瞭然となるのである。

以下にこの辞典による‘splash’（日本語で言えば「ばしゃんと水がはねる」のような意味）という語の記述例を示す。（発音記号や活用形、実例の記述は省略する。）

splash

- 1 If you splash around in water, you hit or disturb the water in a noisy way, causing some of it to fly up into the air.
- 2 If water splashes on something or splashes something, it hits it and scatters in a lot of small drops.
- 3 If you splash a liquid somewhere, you pour or throw it there rather carelessly.
- 4 A splash is the sound made when something hits water or falls into it.
- 5 A splash of a liquid is a small quantity of it that has been split on something.
- 6 A splash of colour is an area of a bright colour which contrasts strongly with the colours around it.

(3) 日常的な場面における「会話例」の提示

教材化の最後の段階は、**会話例**である。「会話例」は、日常生活の様々な場面において交わされると考えられる短い会話例を創作し、提示する。各会話例には、〈だれが〉〈だれと〉〈いつ〉〈どこで〉〈何について〉〈どんなことを〉話しているのかという会話の文脈がわかるように、場面や状況、登場人物を設定し、記述する。また、会話特有の表現や、あいづち、フィラー等もなるべく自然に近い形で提示する。

4-2. 教材化の一例

以下に、基本オノマトペの教材化の一例として、「ぴったり」の例を示す。

用法

1. くつのサイズがぴったり合った。
2. 子供が母親にぴったりとくっついている。
3. 体にぴったりした服を着る。
4. 9時ぴったりに学校に来る。
5. この仕事は私にぴったりだ。
6. これはプレゼントにぴったりの商品です。

文例と意味

1. デパートの洋服売り場で、色とデザインがとてもすてきな服を見つけた。着てみたらサイズもぴったり合ったので、少し高かったけれど、思い切って買ってしまった。

〈意味〉

洋服やくつのサイズがぴったり合うというのは、大きすぎず、小さすぎず、サイズが本当にちょうどいいという意味です。洋服は少し大きくてもだいじょうぶですが、くつの場合は特に、サイズがぴったり合っていると、歩きやすくて足も疲れません。

2. 小学校の入学式の日、母親に連れられて教室に入った男の子は、とても緊張したようすで、母親にぴったりとくっついて離れようとしなかった。

<意味>

小さな子供は、人が大勢いるところなどに初めて行くと、不安になったり緊張しります。そんなとき、子供は母親から離れたくないので、母親の手やスカートをしっかりつかんでぴったりとくっついていきます。

3. 舞台の上のダンサーたちは、みな体にぴったりした服を着ておどっていた。それで、手や足の動きがきれいに見えて、とてもかっこよかった。

<意味>

体にぴったりした服というのは、体の形に合わせて作ってある服です。だから、ぴったりした服を着ていると、服を着ていても体の形や動きがよくわかります。

4. 山田さんは、みんなと会うとき、いつも約束の時間に遅れてくる。でも、今日は、先生もいらっしゃる予定だと言ったら、約束の時間ぴったりに来た。

<意味>

約束の時間ぴったりに来る、というのは、例えば5時に会うと約束したとき、5時ごろ、つまり5時の少し前、4時55分とか、5時ちょっとすぎではなく、ちょうど5時に来るということです。

(用例5. と6. の文例とその意味は、紙幅の関係で省略する。)

会話例

- 1) [デパートのくつ売り場で] A:客 B:店員

A:あおう、これ、ちょっとゆるいんですけど、もうワンサイズ、小さいのありませんか。

B:はい、これですね。今、お調べしてまいりますので、少々お待ちください。・・・

こちらが一つ小さいサイズになりますが。

A:ああ、いいですね。これならぴったりです。じゃ、これ、ください。

B:かしこまりました。

- 2) [結婚式で] A:B:大学時代の友人同士 A:(女性) B:(男性)

A:ねえ、みちこさんと彼、本当にすてきなカップルだよ。

B:うん、あの二人、大学1年のときからほんとに仲がよかったもんなあ。性格も趣味も考え方もほんとに合ってるみたいだよ、お互いに。

A:いいわね。あんなふうに、ぴったりの相手と結婚できるなんて・・・。

現在、このほかに約60語のオノマトペの用例・会話例およびイラストが、国立国語研究所 e-Japan 事業のインターネットサイト「日本語を楽しむー表現豊かな擬音語・擬態語」

<http://jweb.kokken.go.jp/gitaigo/index.html> において公開されている。⁽⁶⁾

5. まとめと今後の課題

本稿は、オノマトペとは何かという定義の問題に取り組むと共に、オノマトペを学習・指導する際のリソースとすることを目的として基本オノマトペを選定し、その教材化を試案として提示した。ただ、ここで提示した基本オノマトペとその教材化は、そのまま学習・指導の対象とされるようなものではなく、あくまでも中級段階までの学習者の自律学習と教師の指導を支援するためのものである。学習者が、日本語学習の比較的早い段階からオノマトペという日本語に特徴的な語群の存在に気づき、またオノマトペによる様々な表現を身につけること、そしてそのために本稿で提示したような教材がリソースとして利用され、学習や指導の一助となれば幸いである。

今後は、より高いレベルでの学習や指導に向けてオノマトペの選定や教材化を行うこと、またそれぞれのオノマトペが持つ異形（例：「ぴったり」に対する「ぴたっと」「ぴたりと」等）とそれらの意味・用法の違い、類義オノマトペとの使い分け（例：「ぴったり」と「ぴったり」等）についても考察していく必要がある。さらに、オノマトペに限らず特に中級以降学習や指導が難しいとされる一般の副詞にも範囲を広げて、同様の教材化を行っていきたいと考える。

注

- (1) 角岡（2002）によれば、語基に「い」が接続するオノマトペは、「ぐい」「ぶい」「ぴよい」「ずい」「ふい」「ひよい」「ぼい」「つい」「ちよい」の9つである。
- (2) ここでいう「必ずする」はもちろん、「勉強を必ずする」という用法とは違う。
- (3) 「オノマトペ度」は、田守・ローレンス（1999, p.189）、「語彙化」は角岡（2004, p.16）によるオノマトペの定義に関する枠組みである。
- (4) これは旧版の『分類語彙表』による調査であるため、『分類語彙表増補改訂版』（2004）におけるオノマトペの全収録語数に対する割合はこれとは異なることも考えられる。
- (5) 初級教科書は、『みんなの日本語初級Ⅰ, Ⅱ』『初級日本語』（外大）『Total Japanese 会話の本Ⅰ, Ⅱ』『初級日本語げんきⅠ, Ⅱ』『日本語初歩』『新文化初級日本語Ⅰ, Ⅱ』『ひろこさんのたのしいにほんごⅠ, Ⅱ』『こどものにほんごⅠ, Ⅱ』『中国からの帰国者のための生活日本語Ⅰ, Ⅱ』『あたらしい じっせん日本語』『ひらけ日本語』『新装版 日本語初級Ⅰ, Ⅱ』（東海大）『Japanese for Everyone』である。中級教科書は、『新日本語の中級』『日本語中級J301・J501』『中級日本語』（外大）『テーマ別中級から学ぶ日本語改訂版』『文化中級日本語Ⅰ・Ⅱ』『ニューアプローチ中級日本語基礎編改訂版』『日本語集中トレーニング』『日本語中級読解新版』『トピックによる日本語総合演習中級前期・中級後期』『中級の日本語』である。
- (6) 現在公開している語には、本稿で選定した基本オノマトペ 70 語と一部異なるものも含まれる。今後、サイト完成時には全部で約 90 語の用例・会話例を載せる予定である。

参考文献

阿刀田稔子・星野和子（1995）『正しい意味と用法がすぐわかる 擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社

- 加藤扶久美 (1999) 「日本語教育における擬音語・擬態語の基本語選定の試み」『富山大学教育実践研究指導センター紀要』No.16、pp.1-9
- 角岡賢一 (2001) 「日本語オノマトベ語彙 派生過程における語基」『竜谷大学国際センター研究年報』第 10 号、pp.43-67
- (2002) 「日本語オノマトベ語彙の接辞」『竜谷大学国際センター研究年報』第 11 号、pp.35-61
- (2004) 「日本語オノマトベ語彙の語源について」『竜谷大学国際センター研究年報』第 13 号、pp.15-35
- 金田一春彦 (1978) 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』所収、角川書店
- 玉村文郎 (1979) 「日本語と中国語における音象徴語」『大谷女子大國文』第 9 号、pp.208-216
- (1989) 「日本語の音象徴語の特徴とその教育」『日本語教育』68 号、pp.1-11
- (2003) 「有契化——語の変容」『國文学 解釈と教材の研究』第 48 卷 4 号、學燈社、pp.6-11
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトベ：形態と意味』くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語・擬態語用法辞典』東京堂出版
- 日向茂男・笹目実 (1998) 「語形からみた擬音語・擬態語 2」『東京学芸大学紀要第 2 部門人文科学 50』、pp.189-209
- 姫野昌子 (2005) 「音象徴語の機能と用法」『言語文化研究Ⅲ現代日本語の様相』放送大学教育振興会、pp.9-23
- 三上京子 (2003) 「日本語教育におけるオノマトベ指導の現状とその方策」早稲田大学大学院修士学位論文 (未公刊)
- (2004) 「初級から教えるオノマトベ—基本オノマトベの選定とその教材開発に向けて—」『ヨーロッパ日本語教育 9 2004 ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』ヨーロッパ日本語教師会、pp.163-168
- 山口仲美 (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社
- 渡邊裕子 (1997) 「日本語教育におけるオノマトベの扱いについての一考察」『学校教育学研究』第 9 卷、兵庫教育大学学校教育研究センター、pp.23-30
- Takehi Hisao, Lawrence Schorup and Ikuhiro Tamori (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese Trends in Linguistics. Documentation 12*, Mouton de Gruyter
- Shoko Hamano (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese* くろしお出版

Selection and teaching of the basic Japanese onomatopoeias

Kyoko MIKAMI

Japanese language has an extensive set of mimetic words, or onomatopoeias, which enables speakers of the language to express their emotions vividly or to describe the situations precisely. In this paper, the author tries to select the basic Japanese onomatopoeias and shows an idea of making practical teaching materials of them designed for students at pre-intermediate or intermediate level.

First, the basic onomatopoeias are proposed, which were selected based on the research of Japanese textbooks and data obtained from newspapers, magazines and scenarios of TV-dramas and movies. The usage of the onomatopoeias and some example sentences in a specific context are also presented to help students in learning when and under what situation that specific onomatopoeia can actually be used so that they can be resourcelized for pedagogical needs. Dialogues in everyday situations using onomatopoeias are given as well, for onomatopoeias are more often used in spoken language than in written one.

A part of the teaching materials of the onomatopoeias is now to be found on the internet site of *The National Language Research Institute*, under the title of "*Nihongo o tanoshimoo – Gitaigo tte? Giongo tte? –*" For details, you are invited to visit the following URL; <http://jweb.kokken.go.jp/gitaigo/index.html> .